

持続可能な未来へ

To the Sustainable Future

②

東京都市大

その教授が個人的に進めてきた地域住民との交流活動と、大学として取り組む新しい研究プロジェクトが合体して生まれたのが「リビングラボ」。社会システム更新の方法論として欧州で注目されているという。

昨年は学生が区立尾山台中学校1年の道徳授業に出向き、「喜んでもらえる誕生日会のプランを企画する」という設定でカードゲームをしながら「ウェルビーイング」について生徒たちに考えてもらった。都市生活学部4年の岸川楽さん(21)は「仲間のことをより良く知ることができたなどの感想が寄せられ好評だった」と手応えを語る。これをヒントに企業研修用のカードゲームも開発した。

坂倉教授は「実験はまだ始まったばかりだが、あと10年やったら何かが変わるのではないかと考えている。今後は情報技術系や工学系の学生も巻き込んでいければ」と期待する。

【大木俊治、写真も】

商店街に社会変革の拠点

東京都世田谷区の尾山台地区にある商店街の一角に、大学と地域の連携で社会変革を目指す研究拠点「おやまちリビングラボ」が昨年6月オープンした。洋品店を改装した交流スペース「タタタハウス」の2階。東京都市大学都市生活学部(世田谷区玉堤)の坂倉杏介教授(50)と約20人の学生が、キャンパスを出て市民の「暮らしの現場」に飛び込み、そこから新しい社会の仕組みを生み出していこうという試みだ。

研究テーマは「ウェルビーイング(Wellbeing)」。心身の健康にとどまらず、「他者や社会にひも付いている」(坂倉教授)充実感の持続も含めた概念で、国連の持続可能な開発目標(SDGs)では17目標の3番目に「健康とウェルビーイング」が挙げられている。

「例えば『町おこし』も誰かの自己犠牲に頼るのでは擦り減るだけで『持続可能』ではない。参加する一人一人が豊かになり、それが地域の活性化につながるっていくというのが『ウェルビーイングな社会』ではないか」と坂倉教授は言う。



開発したカードゲームを手に話し合う(右から)坂倉杏介教授、4年生の滝本美奈代さん、岸川楽さん—東京都世田谷区で6日

- この記事・写真等は毎日新聞社の許諾を得て転載しています。
- 無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。